

綴音・つづれおと

株式会社アモネット 代表 有田真一郎

まず音の話に先立って、なぜ私が音響ではなく「音」に興味を持ちはじめたかについてお話ししましょう。

私は、ある大手音響機器メーカーに入社して営業のかたわら、さまざまな施設の音響設計に携わっていました。三十数年前、某地下街のオープン十周年記念事業の一環として、音響設計・施工のお仕事の依頼をいただいたんです。その時、地下街に元々ついていたのは天井スピーカだったんですが、いろいろ設計シミュレーションを繰り返して、やっぱり天井スピーカより、壁にスピーカをつけた方がいいんじゃないか？ということになったのです。しかし、それは実はすごい試みだったんです。

そんなこと、まだ誰もやってないことだったからです。

私は若い頃から、天井スピーカに違和感を持っていて、地下街開発株式会社の企画課長さんにそのことをお話したら、

「そうだね。そうだよ！」

と賛同してくれて、

「壁掛けしちゃおうか！」

ということになったのです。でも、その会社のほとんどの人たちは、

「そんなの邪道だ！」

と大反対でした。しかし企画課長さん、負けませんでした。最終決定の合同会議の席上でこう発言されたのです。

「天井スピーカでなければならなくて誰が決めたんですか？私は自分の部屋で正面から音楽を聞いています。ただ地下街の場合、正面からお客様の耳の高さにスピーカをもつてくることはできないから、それならせめてすこしでも自然に聴こえるように壁掛けで斜め上から音が出てくる形を取り入れたいと思います。まだどこもやったことがないならやってみたいと思います。大変申し訳ありませんがこういう考えは、ご年配の方には理解

できないと思います。」「

その時私は机の下で手をたたいていました。

そして、

「よし、わかった。お前の思うとおりにやってみろ。」「

という部長さんの言葉で実現させる機会を得たのです。

その地下街は一日5万人くらいの人が利用し、距離は当時360メートル。（現在は590メートルに延長されています）

その空間をゾーン分けして、4〜5メートル間隔にスピーカを設置しました。完成したのが明け方の4時ぐらいでしたが、あの空間の中で初めて音楽をつけたときの感動は忘れません。誰もいない長いトンネルを独り占めしているような感じで、すごく気持ちよかったです。のを感じています。

「2時間後には地下鉄の始発がはいつてきて、人でいっぱいになるんだろ。うな。」

などと考えながら誰もいない静寂の中で、自分が設計した音響機器から流れてくる音に浸っていました。

当時、この地下街はクラシックしか流してはいけなかったことになっていたので、たしかモー

ツアルトの曲をかけていたのですが、近くのスピーカからは近くの音のように聴こえてくるし、でも次の瞬間には遠くから空洞の中を通ってくる音が耳に入ってきて、とても心地良かったんです。設計の段階では、こんな聴こえ方をするなんて想像もしていませんでした。

その時、音のイメージを最初に抱いて設計するということが、音響機器の設計の一つ手前のところにある「音の設計」というものじゃないだろうか、ふと感じたんです。

さあ、6時をまわり、人がちらほら通り出しました。少しざわつきがでてきたけれども、さっきまでの余韻はまだ残っています。

「あれ。何か変わったね。音の聴こえ方が変わったよね。」

みたいな顔をして足早に通りすぎてゆく人たちを見たとき、

「やった！やった！」

と、心の中で小さく拍手！！

8時をすぎた頃から、すごい数の通勤客。まだ店舗は開いてないけど、

「あつ、何か変わった！」

何となくあたりをキョロキョロしながら歩きすぎてゆく。そうとう、ざわつきがある中でも変化に気づいて、

「昨日と何かが違う。」

と、その違いを探すかのようにあたりを見回す光景を目の当たりにした時、

「音つてもものすごい力があるんだ！」

というのを感じました。

その日は明け方4時の独り占めに始まり、一日地下街で過ごしました。

10時、各店舗が一斉に開店時間を迎えます。そうすると各店からおのおののBGMが聞こえてくる。

「あれ？さっきまでの音空間と違うよね。」

何か変な感じですか。

「やっぱり各店のBGMの音量も全部こちらでちゃんとコントロールしてやらないとダメだよね。」

ということを企画課長さんと話していました。

どうしようか？さっそく課長さん、地下街開発株式会社の企画課長として、

「BGMの音量を一目盛り下げなさい。」

という文書とメッセージを各店に流しました。すぐに各店舗のBGMの音量が一斉に一目盛り下がったんです。

すると喧騒の中でも新しく設計したスピーカーから流れるモーターツアルトの曲がうつすらとただよってくるようになって、又その聴こえ方もすごく良かったんです。

昼近くになり、今度はご婦人たちがお買い物に来る時間になりました。忘れもしませんが、じっと立っていたら、

「何か、変わったよね。きれいになったんじゃない？どこがきれいになったのかしら？」と話しながら通って行くんです。

“きれいな音”というのは単体では存在しません。しかし、騒音とは言いませんが、いろいろな音がぶつかりあっている空間の中で、どれかの音量を少しだけ下げてやる。それによつて引き立たせる音があるとしたら、それは「きれい！」になるんじゃないかなと思います。

ただその頃の私は“音”ということを手単なる“スピーカーからでてきた音”ぐらいにしか考えていなかったんです。後々になって、

「そういうことだったのか！」

ということも、よくわかってくるんですが・・・。

設計もある程度満足できるものができ、施工も終わり、お客さんたちが通ってゆく。

「変わったよね。」 「きれいになったよね。」

と言ってくれる。それで売上げが上がるとか、下がるとかじゃないんですが、そのことによつて地下街という空間のコンセプトが、よりはつきりと前面に打ち出せたということがすごく良かったと思います。ですがつい最近、この地下街は延長改修工事があり、また天井スピーカを使った新たな音の試みが始まったようです。

ただ、その頃はまだまだ「音の設計」なんていうのは、ぼんやりとしか考えていませんでしたし、知識もありませんでした。でもそれが、なぜなぜ問答のように頭の中にずっと残っていたんです。

音にはすごい力があることはわかりました。では「音の力」ってどんなものなんだろう？

大きな音を出せば、たしかにみんな振り向いてくれるけれども、次の瞬間には耳をふさいでしまうでしょう。これは決して力ではありません。

では、か細い音なんだけど、聞き耳を立てて聞いてくれる・・・もしかしたらこれは力か

？

っ

もしれません。

「音の力」って、一体何なんだろう？

その頃の私はまだ、要するに「スピーカから出てきた音」だけのことを考えていたのかも知れません。

そうこうしているうちに、二つ目の大きな仕事を頂戴しました。大阪の大手スーパーマーケットの企画課長さんからのお話でした。

「有田さん、スーパーのレジって知ってる？ 買い物行かないからわかんないよね？ じゃあ、今から行ってみようよ。」

と誘われ、二人でその会社が経営しているスーパーマーケットに行きました。

「ねえ、どう思う？ レジの音がすごくうるさいだろう？ 『カチャカチャチャ・・・』

ほら、雑荷台（お客様が支払いを済ませた商品を袋に入れる台）のまわりも『ガチャガチャ・カサカサ・・・』しかも、見てよ。真上に天井スピーカがついてるんだよ。本当にうるさいと思わない？」

たしかに、その当時のレジはうるさかった！ 天井スピーカからはイメージリスニングとい

う B G M が流れてる。これもうるさい！！

「このレジマわりと雑荷台の周辺を、もう少しちゃんとしたいんだ。」

「よくわかりません。われわれ音響屋としては・・・」

「いや、音響屋としての有田さんに頼んでるんじゃない。音の専門家として頼んでるんだよ。」

「音の専門家といわれても・・・。スピーカーやアンプの設計はしますけど・・・。」

「頼むところがないんだよ。一緒にやってくれないか？」

と言われ、

「わかりました。ちよつと研究してみます。」

とお答えしましたが、正直まだピンときていませんでした。

それで、いろいろな本を読みあさりました。なるほど！という本もありましたが、なかなか答えが見つかりませんでした。

そんな時、ある本に出会いました。それがマリー・シェーファーという人が書いた「世界の調律」です。

そこに書いてあった言葉が、私の生涯のバイブルになる大きな言葉となりました。

「目に見える風景があるように、耳に聴こえて来る風景がある」

目に見える風景のことを「ランド・スケープ」と言います。庭園設計や都市景観設計などに使われる言葉ですが、訳すと

「目に見える風景」 “ランド・スケープ”

そして、マリー・シェーファー氏が創った言葉なんです、

「聴こえてくる風景」 “サウンド・スケープ”

この言葉に電気が走って、

「そうだよ！風景だよ！！！」

あのスーパールの企画課長さんが言っていたのは、そういう風景を創りたいっていうことなん

だ！